地元養護学校の卒業生が定着

―株式会社クリエ・ロジプラス　志度事業所―

職場ルポ

（文）清原れい子　（写真）小山博孝

取材先データ

株式会社クリエ・ロジプラス　志度事業所

〒769-2102 香川県さぬき市鴨庄4259-1
(株)ディノス・セシール　志度ロジスティクスセンター内
TEL 087-894-5505　FAX 087-894-5509

keyword: 特別支援学校、運輸・物流業、職場実習、職場見学、障害理解、ジョブマッチング

POINT

① 職場実習で本人の障害特性や性格、仕事の得手不得手を把握。採用後の指導に活かし、スムーズに職場へ
② いきいきと気持ちよく働けるよう、声かけをしたり、悩みも聞き出す。気持ちをクリアにさせることが、職場定着の鍵
③ 先輩が後輩の面倒を見ることで、安心できる環境に

「事業譲渡」で、障害者雇用も引き継ぐ

香川県の高松市から徳島県方面へ。JR志度駅と琴電志度駅から車で数分の丘の上に青い屋根、白い外壁の広大な建物がある。通販を手がける「株式会社ディノス・セシール」の「志度ロジスティクスセンター」で、「株式会社クリエ・ロジプラス」がその物流をになっている。

2012（平成24）年、穴吹興産の関連会社、総合人材サービス事業を展開する「（株）クリエアナブキ」が、「クリエ・ロジプラス」を設立。セシールの物流アウトソーシング事業を行っていた「セシールビジネス&スタッフィング」から事業譲渡を受けた。その際、社員約40人と契約社員500人も転籍した。

経営理念は新たに、「私たちの使命は、地域に雇用を生み出し、雇用により地域を『いきいき』とさせる。お客様の価値を創りだし、お客様と共に成長していく。働く人々の可能性にこだわり、より充実した人生を提供する。主体性を尊び、道義を重んじる社会の良き一員であり続ける」と掲げた。

CL事業部部長の石田万盛さん

ＣＬ事業部志度物流チームマネージャーの東條弘明さん

「クリエ・ロジプラス」は7事業所で業務を展開している。志度と鴨部、春日の各事業所はディノス・セシールの建物内で、朝日新町、庵治、観音寺は新たな建物で行い、今年7月には7番目の拠点、四国中央事業所が愛媛県に誕生した。

クリエ・ロジプラスの従業員は620人あまり。障害者実雇用率は3・1%。障害者雇用の中心は志度事業所で、従業員480人のうち14人（聴覚・言語障害3人、肢体不自由3人、内部障害1人、知的障害7人）が働いている。

お話をうかがったCL事業部部長の石田万盛さん、CL事業部志度物流チームマネージャーの東條弘明さん、管理部シニアスタッフの本田茂城さんは、以前に障害者の人たちと現場で働いた経験があり、3人ともセシールから転籍した。現在、石田さんは高松市にある本社で営業と事業所を統括し、東條さんと本田さんは志度事業所に勤務している。

クリエ・ロジプラスとなった後に入社した障害者は3人。障害者雇用もセシールから引き継いだ。

聴覚障害者から知的障害者の雇用へ

1987（昭和62）年、志度ロジスティクスセンターがオープンした当時は、聴覚障害のある人たちを雇用していた。石田さんも聴覚障害者の直属の上司だったことがあった。

「セシール時代は、主に商品発送の部署で聴覚障害者が商品の振り分け、封緘、

管理部シニアスタッフの本田茂城さん

志度ロジスティクスセンター

職場ルポ

梱包の作業をしていました。志度事業所では、大量にある通販関係の業務のなかから本人にあった仕事を見つけて配置するようにしてきましたが、２００３年に『セシールビジネス&スタッフィング』が設立されて、現場と人事・労務が一体の体制になり、現場の受け入れや、やりとりがスムーズにいくようになりました。どこに障害者を配置できるかを話し合ったら、ここにも、あそこにもできるのではないかということで、いくつかの職場でトライアル的に働いてもらい、職場が広がりました」

ただ、最初から現場の人たちの理解があったわけではなかったらしい。

「私も東條も本田も現場からスタートしましたが、当時は物量も多く、現場は自分たちの仕事で精いっぱいでした。すでに聴覚障害のある社員が働いていましたが、知的障害の人たちを受け入れるときは、現場の管理者が職場をまとめ、とりあえず受け入れる体制をとろうと意思を統一しました」

従業員の9割以上が女性で、「母親」的な立場の人たちが多い。社風は、「あったかいですよ」と石田さん。

「実際に働いてもらうと、仕事ができるんです。同じ作業のくり返しは、むしろ健常者の人たちより正確でミスがない。まだ受け入れていない職場には、『健常者と変わらない仕事をしている』と話して作業を見てもらうと、実際にできている、自分たちがやりたくないと思う仕事も一生懸命やっている。最初は『できない』と思っていた人たちの考えが変わり、成果がだんだん見えてきて、障害者の人たちと一緒に働く体制ができていったのだと思います。いまは、『大丈夫』と受け入れています」

東條さんは、現場の人たちの理解が深まるように務めている。

「通販の出荷をしている事業所ですから、いろいろな仕事があります。『障害を持った方にもできる仕事を』というのが、会社全体の姿勢です。障害者の職場の直属の上司も、セシール時代からの人たちがほとんどですので、気心が知れています。それぞれの違いを認め、『一緒に働けたらいいね、みんながハッピーになったらいいね』という思いを浸透させようと思っています」

クリエ・ロジプラスは、契約社員が圧倒的に多い。２０００年以降は障害者も契約社員として採用しているが、賃金などは健常者と同じだ。勤務時間は、社員は8時40分から17時30分、契約社員は9時から17時20分まで。通勤にはマイカーか、志度駅からのシャトルバスを利用する。

職場実習を行い、双方の合意で採用

かつて、セシール時代にはさまざまなところから職場実習を受け入れていたが、なかなか定着してもらえなかった。そのなかで定着したのは、香川県立香川中部養護学校の卒業生たちだった。同校とのつながりは深く、石田さんはセシールビジネス&スタッフィング時代に、卒業式に来賓（らいひん）として招かれたこともある。

「最初に香川中部養護学校の先生が見学に来られたとき、『仕事はいろいろあります。ぜひ生徒さんをご紹介ください。受け入れ体制はあります』とオープンな感じでスタートしました。いろいろご相談もいただき、コミュニケーションもとれて、関係が築けていったのだと思います。進路指導に熱心な先生が異動した後も、その思いは引き継がれていると思います。やはり指導者が大事ですね」

年2回、2年生を中心に職場見学会を実施し、春と秋に職場実習を行っている。職場実習では、昨年から窓口を引き継いだ本田さんが、それぞれの部署の長から障害者の仕事の状況・習熟レベルなどの報告を受け、本人と連絡ノートのやり取りや希望業務についての話し合いをする。

「今年も6月に1人、3週間の実習を受け入れて、秋にもう一度、4週間程度の実習を受け入れ、採用できるかどうかを判断して、うまくいけば来年4月に入社予定です。実習中に本人の障害特性や性格、仕事の得手不得手などを把握できますので、入社後はスムーズに職場に入ることができていると思います。実習は、香川中部養護学校から新卒で入った先輩6人が

封緘作業をする鳥居之人さん

いる職場を中心に体験してもらっていますが、先輩の面倒見が非常にいい。後輩も心強いと思います」

取材翌日には東條さんが学校で行う「実習報告会」に招かれていた。長年、職場実習の受入れなどで信頼関係が築かれているからこそだろう。採用の苦労はないという。

「いろいろなところから職場実習や採用のお話はいただいたのですが、定着したのが中部養護学校の生徒です。学校がきちんと指導して、働く準備のできている方を紹介していただいていますので、ありがたいつながりができていると思っています。いまのところ、順調ですね」

採用後の指導は現場で行い、所属の長が本田さんたちと連携を図る。現在は、ジョブコーチ、障害者就業・生活支援センターなどの支援を求めることなく、香川中部養護学校からの就職者は、1人も退職していない。

それぞれの職場で、能力を発揮

志度ロジスティクスセンターは6階建て。総床面積は10ヘクタールと、とてつもなく広い。このなかで、入荷、品質検査、保管、ピッキング、出荷検品、梱包、出荷など、商品の入荷から出荷・配送作業までの全工程がバーコードシステムで管理されている。

荷受、発送準備、検品、発送、返品処理、伝票セット、請求カタログ、卸販売と、障害者がかかわる業務もたくさんある。ベルトコンベアが複雑に入り組み、商品が流れていく。

まず、香川中部養護学校卒業生が働く職場へ。鳥居之人（ゆきと）さん（28歳）は2006年の入社以来、発送業務の「振り分け」を担当している。ベルトコンベアで流れてくる段ボールケースに合わせて、商品が少なく隙間が空いている場合は緩衝（かんしょう）材を入れて封緘する。「スピードを速くして、ミスしないように気をつけています。自分ではできていると思います。この仕事が一番慣れています。これからは、ほかのところにも応援に行ってみたいです」

高松市内から通勤に1時間。休みの日は家で過ごす。「給料は貯めています。将来の夢は、お金持ちになりたいです」

2015年秋に途中入社した谷口勝治（かつじ）

商品の振り分け作業をしている
香川中部養護学校卒業生の谷口勝治さん

チラシやカタログの丁合い作業を担当する萬谷嘉紀さん

さん（35歳）も、同じ作業を担当している。

萬谷嘉紀さん（23歳）は、2011年4月から働き始めた。「いろいろな方が勧めてくれて就職しました。仕事は、正直いって楽しい」。商品に同封されるチラシやカタログの丁合いやセット、補充などの「請求カタログ業務」を行う。就職後の2011年秋に香川県立三木高校定時制に入学。4年半通い、今年3月に卒業した。「たいへんでしたが、充実した学校生活でした。授業がよかったので、頑張れました」。

本田さんは「他の部署から応援で来てくれる人への指示もできます。いろいろ経験をさせていますが、これからももっと経験させていきたい」と期待している。

木村郁海さん（26歳）は、2009年に入社して、他社の物流商品の発送準備を担当する。「いまは鴨部事業所から運んでくる商品を所定の場所に片づけています。普段は、ラインからピッキングしたものをパレットに取っています。仕事はとっても面白い。仲間たちと楽しく仕事をしています。後輩には、いつも親切に優しく教えてあげています。これからは、経験のない仕事をやっていきたいです」

最後は、勤続28年の小山志津夫さん（60歳）。志度事業所が完成した1987年に入社した。発送業務全般を担当して、聴覚障害の人たちの取りまとめ役だった。定年を迎えたが、延長して働き続ける。荷受業務の手を休めてもらい、筆談した。

「まだ体力があるので、これからも働き続けたいです。休日には、山登りをしたり、今年は瀬戸内国際芸術祭に行って来ました」

若々しく、60歳とは見えない。聴覚障害の人たちとのコミュニケーションは、セシール時代には手話ができる社員がいた。いまは管理部の担当者が手話を勉強中だ。聴覚障害者の社員は、各種研修にも参加。メールやパソコンの音声変換も利用している。

「仕事は楽しい」と話す木村郁海さん

荷受作業を行う小山志津夫さん（右）

地域密着型企業として、今後も障害者を雇用

クリエ・ロジプラスへの事業譲渡でも引き継がれてきた障害者雇用。障害者雇用の取組みを振り返ってもらった。

石田さんは、「現場の受入れ態勢をつくるのが、一番むずかしかったですね。彼らがいきいきと働いてくれるように声かけをしたり、気持ちよく仕事をしてもらうために、悩みを聞き出して気持ちをクリアにすることで、定着してきたのかと思います。東條、本田ほか、みんなの協力があってできたのだと思います」

東條さんは、「本当にまじめで、よくやってくれています。本人たちも、自分たちが働いていることが会社に貢献できていると、やりがいを感じているのではと思います。大変なところもいっぱいあったと思いますが、セシール時代からの長年の取組みが積み重なって、学校といい関係が築けてきていることと、いい先輩に恵まれて、うまく定着しているのだと思います。これからは、仕事の可能性をもっと広げていきたいと思います」

聴覚障害者の小山さんは、入社して28年のベテランだ

本田さんは「本人たちと接するとき一番感じるのは、本当にピュアで、背筋も伸びているし、あいさつもきっちりするということです。そういう姿を見ると、心が洗われ、自分を見つめ直します。離職することなく、いきいきと仕事をしていただいているということは、現場の方々の理解で、よい職場環境をつくってくれている、ということに尽きると思います。今後もそれが維持・継続できるよう、自分の立場で何かサポートできればと思っています。前任者が築いた香川中部養護学校とのパイプを閉ざさないように、窓口担当者として取り組んでいこうと思います」

障害者雇用の今後を、石田さんに聞いた。

「法定雇用率を大きく上回っていますが、引き続き、増やしていきたいです。地域密着型の企業として、地域に貢献していきたいという考え方を大切にしていますので、働きたい人は受け入れていきたいですね。受入れ職場を増やすには、現場もさらに工夫が必要になってくると思います。精神障害の人たちを受け入れた経験もありますので、現場の意見を尊重して、受入れ態勢がつくれたらと思います。会社として、障害者の受入れ態勢を充実させていきたいと考えています」

いまは、「障害者雇用の安定期」だそうだ。障害者とともに働いた経験を持つ管理職の人たちが現場を理解し、香川中部養護学校卒の後輩は、先輩がいる職場に溶け込んでいた。